戦後における盲学校体育研究の変遷

―全日本盲学校教育研究会に着目して―

中　松　友　宏

キーワード：盲学校体育，全日本盲学校体育研究会，多様化

1. 研究の動機、目的、意義

著者は視覚障害者の伴走に関わる中で、障害者スポーツの一般認知度の低さを実感してきた。また、全盲でも慣れた場所であれば白杖なしの単独で走って移動できるような身体能力がどのように培われたのかにも関心を抱いた。

日本における視覚障害者に対する教育の歴史は古く、明治 11 年に京都盲唖院が開設され、障害者教育がスタートした。中でも体育研究は古河太四郎の盲生体操をはじめ、盲学校体育の実践には長い蓄積がある。この長い蓄積がある盲学校体育において、何が課題とされ研究活動が行われてきたのかに著者は興味を持った。

以上より目的は、盲学校体育に関する研究の現在までの変遷を明らかにすることとした。

また本研究によって明らかにされた変遷から盲学校体育の抱える課題を表面化し、これからの盲学校体育及び視覚障害者教育を発展させるための一助とすることが本研究の意義である。

2. 先行研究の検討

盲教育に関する研究は豊富であり、カリキュラムに１つとしての体育関する研究があるが、その多くは生体反応や教育実践である。盲学校の体育史は昭和 40 年代までについては、指導要領の変化、スポーツ大会の動向、研究活動の動向が明らかにされている。しかし、昭和 50 年代以降は明らかにされていない。

3. 研究の課題と方法

①盲学校体育に関する研究の変遷を、戦後から昭和 40 年代までを再考察する。

先行研究では編年的であった時期区分を本研究では、身体機能・カリキュラム・指導法、体力作りと内容ごとに新たに区分し、第 1 章で述べていく。

②昭和 50 年代から現在まで新たに考察する

第 2 章では小人数化、重複障害の増加、障害の多様化の 3 つに区分し、述べていく。

盲学校の教育に関する研究の変遷を追うことができるものは研究会の発表である。中でも全日本盲学校教育研究会（以下全日盲研とする）は「盲学校を単位として加入し、学校毎に登録した正会員と盲学校に属さない特別会員を以って組織」 されているため、研究の動向によって盲学校教育全体の動向を見ることができる。そこで本研究では全日盲研が発行している機関紙を中心に盲学校体育に関する研究に着目し、その変遷を明らかにしていく。また変遷の背景として、教育指針と大きく関係がある学習指導要領等について検討を加え、全日盲研の研究の変遷と比較する。比較を加えることで、盲学校体育研究の歴史的特長を評価していく。

4. 主要史料

全日盲研の機関紙『盲教育』、『視覚障害教育』と文部省発行の学習指導要領、そのうち盲教育と体育に関するものを使用した。

5.本論

5.1. 全日盲研設立から体力づくりに着目された時代へ

5.1.1. 身体機能・カリキュラム・指導法注目期

昭和 22 年に文部省で『学習指導要領一般編』が告示されたが、特殊教育諸学校については全く言及されていなかったため、各学校独自でカリキュラムを設定する必要があった。

結果として、研究大会ではカリキュラム、指

導法に関する研究、質疑が多く見られた。文京盲の森永による「保健体育カリキュラム構成上の問題点」はこの時期を象徴する発表であった。

5.1.2. 体力づくり重点着目期

昭和 46 年施行の学習指導要領において新たに体育という項目が増え、「体力の向上については、小学部の体育科および中学部の保健体育科の時間はもちろん、特別活動および養護・訓練においても、十分指導するよう配慮しなければならない。」という言及が加えられている。

この期間は、児童・生徒の体力の向上に大きな注目が置かれている。特徴的な発表として香川盲の梶原による「運動を楽しみながら体力づくりをするにはどうすればよいか」が挙げられ、全校、全職員で取り組む実践として 5 分間体操とオリエンテーリングを行ったと報告している。

5.2. 障害の多様化へ対応する時代へ

5.2.1. 少人数による授業合併化期

全国的に児童・生徒数の減少が深刻化してきたこと、盲教育の対象より弱視教育の対象となる児童生徒が多くなったことから、全盲児童と弱視児童の共存がこの期間では注力されている。

そのため生徒の実態に合わせた新しい体育の指導体制を考慮する傾向が見られた。横浜盲の仁科による「児童・生徒の多様化にともなう指導上の問題点とその対策について―本校高等部普通科の場合―」がこの時期を象徴しており、男女編成から能力別編成に変更して体育授業を行うなどの取り組みがみられた。

5.2.2. 重複障害増加への対応期

生徒数がさらに減少し、重複児童数も増加している。その中で個に特に重点を置いた重複障害の体育と、人数の減少で合同授業をせざるを得なくなった単一障害の生徒の通常体育の両方に取り組まなければならなかった。

特徴的な研究発表として、昭和 63 年の福島大会で、従来の卓球より手軽な新卓球を山本、田中が「教材・教具の開発」において発表した。この研究に代表されるように、重複障害児のための指導がより考慮されるようになった。

5.2.3. 障害の重度化・多様化期

平成 23 年の学習指導要領改訂では「体育に関する指導」から、「体育・健康に関する指導」へと記述が変わっている。また平成 19 年度から特別支援学校がスタートし、複数の障害種を教育の対象とでき、児童生徒等の障害の重度・重複化に柔軟に対応できるようになった。

障害が重複化、多様化しているため、この期間の研究に一定の傾向は見られなかった。クロスカントリースキーを取り上げた、瘧師による「地域の特性を生かした題材と指導について」が特徴的な研究で、多様化する障害に対して独自性の高い研究も行われるようになっている。

6. 結論

昭和 34 年から昭和 47 年のうち、盲学校における学習指導要領が示されていない時期にまずは身体機能の実情把握と、カリキュラムの試行錯誤が行われていた。学習指導要領が示され種目も定まってきたため、次の段階として種目における指導法に関する研究が行われたことが明らかとなった。昭和 48 年から昭和 51 年にかけては、教育活動全般を通じて体力の向上が図られるような取り組みと、それに関連した指導の研究が多く行われていることが明らかとなった。

昭和 51 年から昭和 60 年は小人数化のため、グループ別の体育授業に関する研究が注目されていた。また、重複障害児童の増加傾向と学習指導要領の影響から、重複障害児童増加に応じた体育授業と、生涯スポーツを見据えた授業が昭和 63 年から平成 9 年の期間に多くみられた。平成 12 年から現在までは、学習指導要領においても障害の多様化を考慮するよう示しており、研究も多様化していることが明らかになった。

盲学校体育の研究がどのように行われてきたか全日盲研に着目して明らかにしたが、他の研究会を含めると違った結果が現れるかもしれない。また現場の各校で実践されているかをみることはできなかった。盲教育研究全体の傾向と、各盲学校単位での実践の変遷については今後の課題とする。　（指導教員　秋元忍　准教授）